

2019年2月3日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「イエスの新しさ」

聖書：ルカによる福音書5:33～39

「断食」は、ユダヤでは施し、祈りと並んで最も重要な信仰のわざとして位置づけられていた。この3つの行為によって信仰者は、罪を許され、信仰の正しさを認められ、救いを与えられる、そう教えられていた。イエスはこの3つの内、施しと祈りについてはしばしばその大切さを語っておられたが、断食については余り語られていない。むしろ、イエスの弟子たちは断食をしないで、「大酒飲みで大食いだ」などと批判されていた。イエスは何故、弟子たちに断食を要求しなかったのか…？

それはイエスに従った人々のことを思えばよく理解できる。イエスに従った人々は、多くがその日の食べ物にも困るほどの貧しい人々であった。だから、安息日にもお構いなしに道端の麦を摘んで食べたり、わずかな食物を皆で分けて大喜びをする。そして、たまに豪華な食事にありつけた時は、人目もはばからずに大はしゃぎして、お酒も飲んで楽しんだ。そんな人々に何を食べてはいけないとか、誰と食べてはいけないとか、いついつ断食しなさいとか、そんな律法上の食物規定など関係ないのである。食べ物がある時は、いつだって誰とだって感謝して食べる。しかし、食べ物が無い時は自然と断食をせざるを得ない。そんな人々であった。

ではイエスにとって断食とは何だったのか？イエスはある時、てんかんの子どもを癒した後でこう言われた。《この種の悪霊は、祈りと断食によらなければ出ていかない》(マタイ17:21)と。イエスもまた、病に苦しむ子どもを癒すために自ら断食をされた。驚くべき力を用いて癒されたのではなく、自ら共に苦しみ、その子どもの苦しみに連帯することを持って、救いを成し遂げられたのである。イエスにおいて、共に食卓を囲むことが、この世のあらゆる差別や排除を越えた連帯のしるしであったと同じように、食を断つこともまた、苦しみや弱さへの連帯のしるしだった。イエスは、共に食べることに、そして共に食を断つことにおいて、喜ばしい連帯を作りだされたのである。

最後に、イエスは《新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるもの》と言う。それは「イエスの新しさ」を私たちはどれだけ受け止めてきているのか？という問いであろう。私たちは、常に悔い改めと思いを新たに、イエスがもたらす新しさに応えて行きたい。(神谷)